



“自立”と“体力づくり”を

佐藤年緒

「平成」から「令和」に変わる4月、JASTJの事務所を新宿区神楽坂の東京理科大学から、千代田区内幸町の日本プレスセンタービルに移動した。8階の小部屋が並ぶ一角に、3人がやっと作業できるほどの空間。とはいえ、月例会、塾、科学ジャーナリスト賞の贈呈式などをこのビル内で行ってきた経緯からすると、最も身近で便利な場所に事務機能を置いたことになる。

設立（1994年7月）から25年、事務所探しには毎度、苦労が伴った。科学技術広報財団（溜池、新橋）に始まって今回で9カ所目となる。これまで「安い家賃」で間借りできたのは、会の活動に賛同する支援者があってこそ。とはいえ家主側の事情もあり、今回、メディアが集うビルへの入居は「独り立ち」へのステップとなる。ここでしっかりと居を定めたいが、そのためには財政基盤を保つ体力が求められる。

ところで、この25年間で科学技術報道をめぐる環境はどう変わったか。JASTJ発足のきっかけになった東京での「第1回科学ジャーナリスト世界会議」（92年11月、ユネスコなど主催）には、国内外の科学記者らが会社組織を超えて集まった。テーマは地球環境や世界の健康問題に及んだが、こうした地球視野での取り組みは、これからますます増えるだろう。

設立翌年の95年に、阪神大震災、地下鉄サリン事件、「もんじゅ」のナトリウム漏れ事故が発生。この社会を揺るがす3大出来事は、大地震と安全、核燃料サイクルの綻びという形で、課題がいまに持ち越されている。当時には想像できないほど技術が社会に与える影響も顕在化してきた。今年1-3月の月例会

でテーマにした「脱原発で脱炭素社会ができるか」、「生命の“編集”はどこまで許されるか」、「ICTは社会をどこまで変えるのか」との問いは、その典型で警鐘とも言える。

会報の前号で柴田鉄治理事は、科学報道の「産みの親は原子力、育ての親は宇宙開発」と指摘した。日本でこの2分野を政策として担ったのは旧科学技術庁だった。私も含め、JASTJ会員に同庁を担当した記者も多い。「国策」に追随したとの批判は免れないが、同庁の「記者クラブ」で役所幹部ともよく議論し、記者同士が励まし合った面もあった。2001年の省庁再編で科技厅と文部省が統合して文部科学省となり、科学記者が寄り集う環境は変わったと聞く。

いま科学を伝える人は新聞社・放送局の記者だけでない。フリーのライター、科学コミュニケーターも増え、メディアはSNSにも広がり、だれでも発信できる時代となった。それだけに生身の人間に接して、信頼性の高い記事を書くことが大事になる。「突発」する成果発表や事件、災害に対しても、「日常」からその分野を学んでおく。取材源との交流と研鑽、研究現場の見学、さらに賛助会員との意見交換は不可欠なのである。

JASTJはこれから、一つの役所にとらわれず、世界に開き、関係者の多くが交流する「記者クラブ」の役を果たせないか。国家、産業だけでなく、市民に目線を置いた健康や平和、防災、自然の探求などのための科学技術を伝える。そんな私たちの活動に多くの賛同者を得ながら、体力をつけていければと願っている。
(JASTJ会長)

CONTENTS

巻頭言	1
総会報告	2
科学ジャーナリスト賞2019	4
贈呈式／総評／選考経過	
受賞者のことば／写真で見る授賞式／選考を終えて	

例会報告（3月）第3回討論会「ICTと社会の変化」	11
例会報告（4月）人間拡張工学がもたらすもの	12
会員だより 温暖化防止の重要性どう伝える？	13
オピニオン／WEB編集長から	14
事務局だより	16

創立25年を迎え新たな飛躍を

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）は5月28日、東京・内幸町の日本プレスセンターで通常総会を開催した。正会員32人が出席、欠席者のうち46人が議決を議長に委任したため、正会員数184人の5分の1とした定足数37人を超えた。

総会では昨年度の活動、決算、監査、新年度の活動方針と予算案を報告。昨年度決算については、監事の高石憲氏（個人会員）と湯浅誠氏（賛助会員：カクタスコミュニケーションズ株式会社）が監査結果を報告。会則・細則の一部改正（学生会員優遇制度、理事・会員への実費支払い、WEB編集長職務定義、顧問設置など）の議題と併せて全会一致で承認された。昨年度活動報告と今年度事業計画の概要は以下の通り。

■全体

2019年3月末に、無償提供されていた東京理科大学内事務所の3年契約期限を迎えたため、4月に日本プレスセンタービルへ移転した。また、会員の「顔」が会員同士で互いに見える会にするために、自己紹介文も含めた名簿を総務・財務委員会が主体になって作成した。創立25年を経て、会員の年齢構成や会の事業の継承、メディアの多角化、財政基盤などを意識した運営が求められている。今年度も各委員会は昨年度同様の企画を遂行するが、プロジェクトの横断的な取り組みに努力したい。

■企画委員会

月例会9回、見学会1回、交流会2回のほか特別企画として映画「おクジラさま」上映会（監督と語る）を開催。新年には、JASTJ創立25年企画「未来をどう切り開くか」討論会など多彩な活動を行い、JASTJの社会的責任についても考察。科学ジャーナリスト塾では参加者が13人になり、企画の立て方、取材の仕方、文章の書き方、編集の仕方などを実施。JASTJ理事らによる講義の後、記事作成とプレゼンテーショングループに分かれて作品をWEBなどに発表。今年度には「デジタルジャーナリズム」の要素を取り込み、新しい時代のジャーナリズム像を模索する。

■編集委員会

会報とWEBを一般会員にJASTJ活動への参加を

促す場として活用、会報は副編集長を二人体制に強化した。会員がJASTJに何を期待しているか実態を把握するための意識調査アンケートを実施したほか、WEBのビジュアル化、会員のプロフィール掲載など内容の強化などを進めた。今年度も世代交代を意識しながら引き続き会報とWEBの編集体制強化を進める。

■科学ジャーナリスト賞委員会

昨年7月から科学ジャーナリスト賞選考募集開始し、最終選考を経てプレス発表、5月28日に贈呈式を開いた。最終選考委員の交代として、大池淳一、佐々義子、元村有希子の3理事を新任。J賞カフェ3回、9月上野の森美術館「世界を変えた書物展」に見学会を実施。今年度は、広く科学の本について語り合うサイエンス・ブック・カフェ（仮称）を設け、J賞選考の活性化につなげることも予定。

■国際活動

JASTJホームページに、英語によるJASTJの紹介サイトを開設。7月には欧州科学オープンフォーラム（ESOF）、世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）の年次総会などに理事、会員が出席した。19年の世界会議ローザンヌ大会に向けて、経済的に恵まれないジャーナリストの旅費と滞在費を支援する「世界会議フェロシップ・プロジェクト」が世界連盟事務局に編成され、JASTJからは小出重幸理事が選考委員として参加した。

■その他

会計関連では帳簿システムの刷新を図り、事業別の経費を見やすくした。賛助会員の勧誘と交流を目的に、日本学術振興会との合同シンポジウムの開催。「なんでも検証プロジェクト」では福島原発事故のその後を取り上げ、Web上に映像と記事で公表。

◇◇◇◇◇

19年に創立25年を迎え、各委員会を中心にした活動範囲拡大を図るためには、財政の確保が急務である。事務局、総務・財務委員会をはじめとした、理事全員による積極的な会員増などに努めたい。

引き続き皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。（事務局長 山本威一郎）

2018年度 決算報告 (2019年3月末：単位は円)

収入			支出	
前年度繰越金		4,645,533	費目	摘要
会費収入	正会員 (189名)	2,106,000	会議費	(総会・理事会等)
	賛助会員 (12社15口)	1,800,000	事務局人件費	68,496
			備品・消耗品費	1,321,779
			事務所家賃	255,471
			通信費	84,788
その他の収入	参加費 (月例会・見学会・上映会)	218,000	支払手数料	(文具・郵送代・OA機器等)
	塾関連費	437,500	H P管理費	81,802
			雑費	(電話・メール管理料)
	雑収入 (上映会寄付・飲み会おつり)	167,377	交際費	(振込手数料・ビジネスWEB)
	利子	19	税金	65,556
			[管理関係小計]	7,184
			月例会費	(引越し費用等)
			塾運営費	(弔電)
			会報刊行費	(源泉徴収費)
			P国際化対応費	36,612
			P科学J賞運営費	2,022,857
			P検証プロジェクト費	290,433
			[事業小計]	398,185
単年度収入計		4,728,896	単年度支出合計	673,215
			収支	615,603
			次年度繰越金	939,685
				11,617
				2,928,738
				4,951,595
				- 222,699
				4,422,834

2019年度 予算計画 (単位は円)

収入			支出	
前年度繰越金		4,422,834	費目	摘要
会費収入	正会員 (含む地方会員、学生会員)	2,106,000	会議費	(総会・理事会等)
	賛助会員	1,800,000	事務局人件費	(職員給与)
			備品・消耗費	100,000
事業収入	塾関連費	450,000	事務所家賃	(事務に必要な費用)
	その他	250,000	通信費	150,000
			支払手数料	(プレセン事務所賃貸料)
雑収入	親睦会会費など	200,000	交際費	(電話・メール管理料)
	寄付	100,000	雑費	90,000
	利子など	20	税金	(振込手数料・ビジネスWEB)
			予備費	70,000
			[管理関係小計]	(賛助会員などとの懇親など)
			月例会・見学会費	50,000
			塾関連費	(上記外の費用)
			会報発行・web 編集費	100,000
			P国際化対応費	(源泉徴収費)
			P科学J賞運営費	50,000
			P検証プロジェクト費	300,000
			[事業小計]	2,770,000
単年度収入合計		4,906,020	単年度支出合計	3,170,000
			収支	5,940,000
			次年度繰越金	- 1,033,980
				3,388,854

2019年度の理事及び監事と主な担当

会 長	佐藤 年緒	(兼) 総務・財務委員長
副会長	滝 順一	J 賞委員長
	瀧澤美奈子	国際、企画
	室山 哲也	企画委員長
会報編集長	高木 勲生	編集委員会委員長、検証
WEB編集長	湯浅 誠 (新)	Web編集長
事務局長	山本威一郎	総務・財務
同補佐	柏野 裕美	総務・財務、会報編集、国際、企画
理 事	縣 秀彦	企画、J 賞
	飯島 裕一	会報編集
	内城 喜貴	会報編集、企画
	大池 淳一	J 賞、Web編集、企画
	大江 秀房	会報編集、検証
	鴨志田公男	J 賞、企画
	倉又 茂	会報編集、検証
	小出 重幸	国際委員長、J 賞
	佐々 義子	J 賞

理 事	柴田 鉄治	J 賞、検証
	高橋真理子	国際
	武部 俊一	会報編集、J 賞
	都丸亜希子 (新)	会報編集、J 賞
	中道 徹	総務・財務、J 賞、検証
	西野 博喜	検証、Web編集、企画
	林 勝彦	検証、J 賞
	早野 富美 (新)	会報編集
	引野 肇	企画
	藤田 貢崇	総務・財務、システム
	三輪 佳子 (新)	調整中
	元村有希子	J 賞
監 事	北村 行孝	会員
	佐藤 征夫	賛助会員 (新技術振興渡辺記念会)

注) (新) は新任。理事が担当する委員会には、総務・財務委員会、編集委員会、企画委員会(含む)、科学ジャーナリスト賞(J 賞) 委員会、国際委員会がある。他に検証プロジェクトの活動がある。

金沢工大とNHK津放送局の2作品に大賞 優秀賞は毎日新聞など3作品

優れた科学報道や科学者による啓発的な著作、科学コミュニケーション活動などを表彰する科学ジャーナリスト賞の贈呈式が5月28日に東京・内幸町の日本プレスセンターで開かれた。14回目の2019年度は大賞2作品と優秀賞3作品が選ばれた。

初めに長年選考委員を務められ今年1月に逝去された米沢富美子氏に参加者全員が黙祷を捧げた。次にJASTJの柴田鉄治理事（選考委員長）が選考経過を報告、受賞者の表彰に移った。

一つ目の優秀賞は毎日新聞の鳥井真平氏が独力で掘り起こし掘り下げた「ハゲタカジャーナル」を巡る一連の報道。選考委員の浅島誠氏が「日本の科学の信頼性が問われる問題。鳥井さんが報道しなければ明るみに出なかった」と粘り強い調査報道の成果を称えた。

二つ目は科学史家で予備校講師の山本義隆氏の著作「近代日本一五〇年——科学技術総力戦体制の破綻」。江戸末期の開国以来、欧米の科学技術を導入し国威発揚に努めてきた日本という国のあり方への疑問を「3・11の原発事故とその後の状況まで視野に収めて、一般の読者向けに伝えた」と選考委員の村上陽一郎氏は作品の意義を強調した。

三つ目の優秀賞は、国立科学博物館人類研究部長（副館長）の篠田謙一氏の著作「江戸の骨は語る—甦った宣教師シドッチのDNA」。選考委員の村上氏は「DNA解析技術の使われ方を、歴史上多くの人を知るシドッチの骨の解析に言寄せてわかりやすく伝えた」と作品の魅力を語った。

大賞に輝いたのは、金沢工業大学が長年にわたって

取り組んできた自然科学書の稀覯本の収集活動とその一部を一般に公開、展示した「世界を変えた書物」展。昨年9月に開いた展覧会に足を運んだ選考委員の白川英樹氏は「地味な展覧会と思って行ったら押すな押すなの盛況。若い学生たちが熱心に見入っていたのに感銘を受けた」と金沢工大の地道な活動を称え、展覧会の企画に力を尽くした金沢工大准教授の宮下智裕氏に記念の盾を手渡した。

もう一つの大賞はNHKスペシャル「見えないもの

がみえる見える川 奇跡の清流・銚子川」。番組の制作に携わった日本放送協会（NHK）津放送局第三制作ディレクターの森哲也氏とチーフ・プロデューサーの遠山哲也氏の2人に記念の盾が贈られた。

選考委員の相澤益男氏は「心からの感動を呼ぶ映像の美しさに加え、なぜこれほどの透明度が保たれるのか科学的な根拠も示した」と科学コ

ミュニケーションの好例である点を強調し受賞者の功績を称えた。

最後に白川氏が総評を述べ「選ばれなかった作品にも優れたものがあつた。科学者の手による素晴らしい作品を今後も期待したい」とした。記念撮影の後、参加者全員で乾杯、くつろいだ雰囲気の中で受賞者一人ひとりがあいさつし著作や制作の過程での苦労などを明かした。

今年の贈呈式は室山哲也副会長と元村有希子理事のコンビによる司会で来場者との質疑応答など大いに盛り上がった。また武蔵野美術大学の学生たちに運営を協力していただいた。（副会長 滝順一）



胸花を付けた受賞者と選考委員らが一堂に集まって記念撮影
(撮影 柏野裕美)

大 賞	金沢工業大学 ●「世界を変えた書物」展など自然科学書の稀覯本収集・展示活動
	NHK津放送局第三制作ディレクター 森哲也、チーフ・プロデューサー 遠山哲也 ● NHKスペシャル「見えないものが見える川 奇跡の清流・銚子川」
優秀賞	国立科学博物館副館長・人類研究部長 篠田謙一 ● 書籍「江戸の骨は語る—甦った宣教師シドッチのDNA」(岩波書店)
	駿台予備学校講師 山本義隆 ● 書籍「近代日本一五〇年——科学技術総力戦体制の破綻」(岩波書店)
	毎日新聞社水戸支局兼科学環境部記者 鳥井真平 ●「ハゲタカジャーナル」をめぐる報道

選考委員（50音順、敬称略）【外 部 委 員】相澤益男、浅島誠、白川英樹、村上陽一郎

【JASTJ委員】大池淳一、佐々義子、柴田鉄治、林勝彦、元村有希子

考えさせられた科学報道の役割

白川英樹さん

科学ジャーナリスト賞創設時から外部選考委員を続けてこられた米沢富美子さんが1月にお亡くなりになったので、本年度は外部委員4人とJASTJ内部委員5人の9人で最終選考を行った。

一次選考通過作品は昨年度より2件少ない12作品だが、受賞件数は大賞や特別賞を含めて例年通り4～5件に絞るためにかなりの激論が交わされた。その中で、企画・展示の「世界を変えた書物」展（9/8～24）など金沢工業大学による自然科学書の稀覯本収集・展示活動と、映像のNHKスペシャル「見えないものが見える川 奇跡の清流・銚子川」は9人全員が一致して高く評価し大賞に決まった。

科学ジャーナリズムの役割の一つは、科学・技術の成果を一般の人に分かりやすく伝えることだろう。ただ、今年3月発行のJASTJ会報の巻頭言で柴田鉄治選考委員長は、これまでの科学報道について「科学記者の役割は『難しい科学技術をやさしく解説することだ』として、そのマイナス面に目を光らせなかった」と反省されている。科学・技術の発展が社会にどのような影響を及ぼすか、どのような負の側面が潜んでいるかを知らせることや、将来に向

けた展望について言及すること、科学ジャーナリズムにとって重要な使命であると思う。

この観点から、毎日新聞社の鳥井真平氏による「ハゲタカジャーナル」を巡る新聞報道は、科学者や研究者を対象とした悪徳ジャーナルがなぜ学術の世界を破壊するという負の側面を持っているかを、広く社会に伝えるという点で大きな役割を示した。

個人的なことだが、大学を退職した前後から科学・技術の意義や成果を伝えるのは科学ジャーナリストだけでなく、学者・研究者こそその一端を社会にも還元するべきだと思うようになった。この点で今年の受賞作品で唯一研究者によって著された篠田謙一氏の「江戸の骨は語る——甦った宣教師シドッチのDNA」は一般的なDNA解析の仕組みなどを丁寧に説明しながら、遺骨の対象をシドッチに絞る様が研究者の側から丁寧に描かれている。今後は学者・研究者による作品が増加することを願っている。

（筑波大学名誉教授、ノーベル化学賞受賞者）



外部選考委員を代表して
総評する白川英樹さん
（撮影 柏野裕美）

選考経過

初めて展示企画に大賞

今年の応募作品は、新聞4、映像7、書籍42、WEB2、展示3の計58点と、昨年の92点、一昨年の73点と比べてもかなり少なかった。理由は分らないが、新聞、テレビの応募作品が少なかったことが響いたのだろう。

賞の対象には、いわゆるスクープと企画物の2種類あるが、新聞、テレビの応募作品が少なかったことは、同時にスクープが少なかったことを示しており、その点がちょっと物足りなかった。しかし、この中から12点を残して選考委員会にかけた結果は、なかなかユニークなものが選ばれ、決して見劣りするとはなかった。

今年の特徴を挙げれば、大賞に2点を選んだこと、かねてから懸案となっていた「展示企画」がその大賞に選ばれたことだ。大賞が2点選ばれたことは、2012年に次いで2回目だが、展示企画の大賞は、もちろん初めてである。

展示企画の顕彰がかねてから懸案となっていた理由は、開催期間が限られているため、終わったあとで評価することが難しいからだ。そこで今回は、開催期間中に選考委員に見てもらい、ほぼ全員から高い評価を得たので、初めての大賞受賞が実現した。「世界を変えた書物」展など、金沢工業大学の展示はなかなかのものだった。

もう一つの大賞はNHKスペシャル「見えないものが見える川 奇跡の清流・銚子川」はサイエンスものとしては、いま一步のところもあったが、映像作品としての秀逸さが大賞に押しあげたといっている。

優秀賞の3点は、いずれも優れた作品だが、このなかで山本義隆氏の「近代日本一五〇年——科学技術総力戦体制の破綻」について、「これは科学ジャーナリスト賞ではないのではないか」という疑問の声も出そうなので、ひとこと付言すると、「福島原発事故の深刻さを鋭く衝いた、日本の科学技術に対する厳しい批判の書だ」と、選考委での評価は高かった。（理事・審査委員長 柴田鉄治）

人類の叡智をめぐる旅をデザイン

金沢工業大学准教授 宮下 智裕さん

科学ジャーナリスト賞2019大賞という名誉な賞をいただき、たいへん光栄に思っています。この「世界を変えた書物」展は、金沢工業大学が科学技術の偉大な発見発明を記した稀覯本をコレクションした「工学の曙文庫」がベースとなっています。学生にとってこういった科学技術の根元に触れ、学ぶことが非常に重要であるという考えから所管しています。

これまでも、大学内での展示は行ってきましたが、これらの素晴らしいコレクションを、より多くの方々に見ていただく機会を作りたいということで、金沢工業大学ライブラリーセンター顧問の竺覚暁教授の監修のもと約130冊を厳選し、建築学部所属する宮下智裕研究室の学生とともに展示空間デザインを行いました。そのスタートは、2013年の金沢21世紀美術館での展示からでした。

学生との議論から生まれた展示空間

コペルニクスの「天体の回転について」、ニュートンの「プリンキピア」など人類の叡智の詰まった一冊一冊の書物の歴史的価値は言うまでもありませんが、展示にあたり、これらをいかに一般の多くの方に興味を持っていただけるかという点をずっと考えてきました。

科学技術と言うと、一般にはかたい印象を与えて

しまうのではないかという不安もありました。また、せっかくの稀覯本も見開きの形でしか見せることができないという葛藤もありました。そこで学生との議論をくり返し、その中で訪れた方々が人類の叡智を巡る旅に出たような感覚を持ってくれたらと考えるようになりました。

電子書籍などが増えている現代ですが、書物そのものが持っているリアルで圧倒的な重さや存在感を感じてもらう空間を「知の壁」と名付け、旅のスタートとしました。稀覯本のメインの展示空間となる「知の森」では、一冊一冊の偉大な書物と向き合いながら、また歴史の流れの中でそれぞれの物語を持って生み出されてきたことに思いを馳せながら、旅をするように巡っていくような配置としました。そして、人類の叡智のつながりをつつ紡ぎながら見ていただけるような全体構成を目標としました。

その結果、上野の森美術館で開いた東京展では7万人を超える方々に見ていただくことができました。これまで、金沢を皮切りに、名古屋、大阪、東京と巡回しましたが、合計では17万人以上にご入場をいただいております。本当にうれしく思っています。一回の来場では時間が足りず、会期中に何度も足を運ばれた方も数多くいらっしゃいました。また、ご来場いただいた方々の年齢も実に幅広く、特に若い世代の人たちが熱心に稀覯本を見ている姿に感銘を受けました。小学生が「この名前知ってる!」と言いながら、楽しそうに両親と話をしている様子を見て、この展覧会を通してみんなで目指してきたものが実現できたという実感もありました。

9月には福岡展も

今年も9月に福岡で「世界を変えた書物」展を開催する予定となっており、現在、新たな展示デザインを計画中です。さらに多くの方々に、科学技術の世界の素晴らしさを「世界を変えた書物」を通して伝えることができればと思います。

最後になりましたが、「世界を変えた書物」展の開催にあたり、ご尽力をいただいた関係各位と展示デザインに関わった学生に心からの感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。



白川英樹さんから記念の盾を受け取る宮下さん

(撮影 柏野裕美)

地方局の使命を胸に刻んだ受賞

NHK 津放送局チーフプロデューサー 遠山 哲也さん

このたびは、信じられないような素晴らしい賞をいただき、本当にうれしく、光栄な気持ちでいっぱいです。私たちは、番組制作を始めてから完成するまで「川の本来の姿とはどんなものか？」というテーマについて考え続けてきました。私たちなりのその答えが、科学ジャーナリズムの最高峰という場で評価していただけたことは、今後の大きな励みとなります。

構造的課題が先行する地方

今回の受賞により、とりわけ大きな勇気を得たのが、私たちが所属するNHK津放送局です。津局は全国のNHKの地域放送局の中でも小さい局です。しかも、三重県出身で現在も家族とともに三重県に暮らすフリーのディレクター・森哲也さんが企画から撮影、編集、完成に至るまでを一貫して制作したものです。こうした地域密着の態勢でNHKスペシャルを制作したことだけで、NHKの中では驚きを持って受け止められました。

地方のテレビ番組制作の環境は（NHKはまだ恵まれていると思いますが）年々厳しさを増しています。しかし、少子高齢化、医療や教育の崩壊、環境問題など、日本の抱える構造的課題の多くが、地方でより先行しているように感じます。優秀な人材が中央に集まる中、地方でこそマスメディアが頑張らねばならない。そんな状況下で、私どもが榮譽を受けたことが、NHK津局だけでなく他の地方のメディアも含めた励ましとなれば、それ以上の喜びはありません。

授賞式では、御講評をいただきました相澤益男先生をはじめ、普段はお会いすることが叶わないような著名な研究者、ジャーナリストの皆さんと交流する機会を得ることができました。皆さんから私どもの作品についてお褒めの言葉をいただいたことは、望外の喜びでありました。

しかし、今回の式典でなによりも心に残ったのが、質疑応答における皆さんの議論でした。「科学ジャーナリズムに不可欠なのは批判精神である」。受賞した皆さんのお仕事にはどれも、批判精神が貫かれていました。当たり前のことかもしれませんが、批判



相澤益男さんから祝福を受ける遠山哲也さん（中）とディレクターの森哲也さん
（撮影 柏野裕美）

をするには、自らも批判にさらされる覚悟が必要だ。そんな意識を明確に持って、自らの仕事に向き合っていたらどうか。心に残ったというより、反省させられた、というのが正直なところ。自分がこの仕事に就いた時の、原点に立ち返ったようなすがすがしい気持ちでもありました。

課題も抱える銚子川

実は、銚子川にも、厳しい批判精神を持って取り上げなければならない課題があります。美しい川として有名になるほど、マナーの悪いキャンパーが押し寄せ川を汚していくこと。銚子川の上流部に計画されている建設残土埋立地の問題などです。表面的な批判ではなく、なぜそのようなことが起きるのか、日本の環境教育や、地方と都市の産業構造といった、深い問題意識まで掘り下げて考えなければならないテーマです。

今回の番組では、銚子川の流域の町、三重県紀北町で、貴重な自然と向き合っている暮らし人々に大きな支援をいただきました。皆さんは、銚子川の美しさを広く報道されることのメリットとデメリットについても、それぞれに深く考えた上で力を寄せてくださいました。そうした皆さんに恥じないよう、これからも微力ではありますが、地域の財産や課題に真摯に向き合っていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

ハゲタカジャーナルを追って

毎日新聞水戸支局兼科学環境部記者 鳥井 真平さん

(報道時は大阪本社科学環境部記者)

きっかけは、ある大学教授との会話だった。「内容がない論文が掲載される学術誌がある」。2017年秋、この言葉に疑問を感じた。学術界で何が起きているのか。手探りで情報を集めた。

「査読付き国際誌と称しながら、実際は査読がない」「出版社の実態がない」「無許可で著名研究者を編集委員として記載する」など、インターネット専用学術誌の中に、多くの問題を抱える粗悪学術誌「ハゲタカジャーナル」が急増していることが分かった。

問題ある学術誌をなぜ利用するのか。多くの利用者に話を聞いた。「業績を作るため」「教授の指示で使っていた」「博士論文の審査を通りやすくするため」——。彼らの言葉には耳を疑った。意図的にハゲタカ誌を使う研究者の存在が明らかになり、手軽に業績を増やしたい研究者と、掲載料で稼ぎたいハゲタカ出版社との間に互助関係が成り立っている構図が次第に浮かび上がった。ビジネスとして成り立っていた。

ハゲタカ誌の利用は、査読システムを自ら壊し、

学術論文への信頼を損なう行為ではないだろうか。モラルハザードが広がっている。「私は何も悪いことはしていない」。ある研究者に吐き捨てられた言葉が忘れられない。

ハゲタカ誌の掲載論文は別の論文で引用され、長年の蓄積の上に成り立つ研究全体がむしばまれていっているとも言える。数年後、数十年後に大きな影響が出てくる可能性もある。一連の報道をきっかけに、一部の大学で研究者に対し注意喚起が始まったが、科学者コミュニティには自浄作用が求められていると指摘したい。

学術界のネガティブなテーマで、苦しい取材ばかりだった。それだけに、贈呈式でいただいた「科学の負の面を取り上げた」という過分な評価は、報われた思いでした。取材に協力していただいた多くの方々に深く感謝いたします。



鳥井真平さん
(撮影 柏野裕美)

科学ジャーナリズムの役割について思う

駿台予備学校講師 山本 義隆さん

ジャーナリズムは、かつて原子力問題では、核分裂の説明や原子力の用途など「啓蒙」に励んだ。しかし現在では「批判」が求められている。

科学に裏付けられた技術としての科学技術が西欧に生まれたのは19世紀後半、その頃に日本は、産業と軍の近代化を目的に、国の主導で科学技術の輸入を図った。

その科学技術は、社会的関連のなかで現実化される。とりわけそれは、中央官庁と大企業、その背後の有力政治家や学界のボスなどで構成される利権集団によって推進されるとき、ブレーキのきかないプロジェクトとして暴走する。その手の巨大プロジェクトは、往々にして地元住民への十分な説明もなく、自然環境や地域共同体の破壊をもたらしてきた。

一例を挙げよう。リニア中央新幹線計画がまさにそうだ。

貴重な自然の残る中央アルプスにトンネルを掘るのは、甚大な自然破壊である。膨大な電力を要とする計画自体、合理性を欠いている。品川・名古屋間

2027年開通、名古屋・大阪間は2045年に開通とあるが、品川・大阪間全通までの18年間、人は、名古屋までリニア新幹線、そこで乗り換えて大阪まで在来の新幹線という面倒なことをするのだろうか。乗り換えには地下数十メートルのホームまでの上がり降りを要する。

第一、人口は減少し、会議など、パソコンがあれば行かなくともできる時代である。外国からの観光客も、車窓の風景の楽しめる在来新幹線を選ぶであろう。それゆえ品川・大阪全通を前に赤字が出ることも予想されるが、そうするとまた、私企業の赤字を国庫が尻拭いするのだろうか。

これは一例だが、この手のプロジェクトにたいする科学ジャーナリズムの役割は、中央官庁や大企業による「明るい未来」の宣伝の背後にある問題点を早期に発き出すことにこそ、求められている。



山本義隆さん
(撮影 柏野裕美)

文化としての自然科学を

国立科学博物館副館長(兼) 人類研究部長 篠田 謙一さん

学生時代に受けた講義で、イギリスでは「サイエンスはカルチャーとしての地位を確立している」という話を聞いたことがあります。私自身は卒業後医学部に勤務し、その言葉の重要性を考えることもなく過ごしたのですが、15年ほど前に博物館に移って、このことを真剣に考えるようになりました。

自然史の博物館の研究は、直接的に利益を生むものではありません。まあ、珍しい昆虫や化石などは、それなりにお金になる可能性はありますが、そもそも集めている研究者にはそういうマインドはありません。利潤と効率だけが価値基準になってしまった社会の中で、基礎科学には資金が廻らず、博物館はまるごと「博物館行き」の運命が待ち構えているように思えます。

インバウンドの来館者を取り込んで、利潤を追求することも博物館の生き残り戦略として重要なのですが、長期的に見れば、自然科学も文化の一部を担うものだということが社会に認知して貰うことの方がはるかに重要です。ゴッホやピカソも絵を売

って金持ちになろうと思っていたわけではないでしょう。基礎研究者に利益を求めるのも同じことです。

本書は、そんな問題意識の中で書いたものです。実際のところは、研究者としてたいへん面白い経験をさせていただいたことで、これは皆さんに知っていただきたい、という程度の動機で書き始めたのですが、原稿を読んだ編集者からは「行政に対する不満があらわですね」とも言われました。

制限のついた研究をするのに慣れない基礎科学者には荷の重い仕事だったことも事実です。しかしこれが行政の依頼ではなく、軍事の基礎研究だったらどうだったのでしょうか。本書も世に出ることはなかったことだけは確実です。それが分かっている研究者がどのくらいいるのか、昨今の風潮には少し心配しています。



篠田謙一さん
(撮影 柏野裕美)

写真で見るJASTJ贈呈式



審査経過について話す選考委員長の柴田さん (撮影 倉又茂)



贈呈式で挨拶するJASTJ会長の佐藤さん(撮影 柏野裕美)



息の合った司会をする理事の元村さんと副会長の室山さん (撮影 柏野裕美)



会場で談笑する選考委員の白川さん(右) (撮影 柏野裕美)



贈呈式の後には淹理事の音頭で乾杯し懇談へ (撮影 倉又茂)



毎日新聞の鳥井さん(左)に記念の盾を手渡す選考委員の浅島さん (撮影 倉又茂)

「科学ジャーナリスト賞」贈呈式 日本科学技術ジャーナリスト会議



裏方で頑張ってくれた武蔵野美術大学の学生たち (撮影 柏野裕美)

「奇跡の清流」 見せた美しい映像

相澤 益男さん

大賞を受賞したNHKの「見えないものが見える川 奇跡の清流 銚子川」は、映像の美しさで際立っていた。ほどよく誘うナレーションもすがすがしい。加えて、タイトルが絶妙。まず、「見えてくるものは、なにか？」と興味をそそる。当然のことながら、「なぜ、奇跡の清流なのか？」と疑問がわく。見る者の心の動きをくすぐりながら、美しい映像で魅了する見事なシナリオだ。

見えてきたのは、河口周辺で海水と淡水が出会う「汽水域」にくっきりと現れた、上下二層の界面。海の魚が淡水に適応しようとするさまざまな生態に、目を奪われる。ボウズハゼの逆立ち泳ぎは新発見であろう。では、なぜ、この透明度が維持できるのか？その科学的根拠は、水源の大台ヶ原から熊野灘に至るまでの全流域に形成される、驚異的な自然浄化システム。中でも、中流域の川底の下に広がる無数の“伏流水”と、そこに棲息する生物群は、特筆される。こうした清流は随所にあった筈であり、銚子川はむしろ奇跡的なのだと受け止めたい。

(科学技術振興機構顧問、東京工業大学名誉教授・元学長)



警鐘ならしたハゲタカ報道

浅島 誠さん

「ハゲタカジャーナル」を日本でメディアとして最初に問題提起したのは、毎日新聞の鳥井記者のスクープ記事である。多くの研究者は、このように査読もなく、かつ高額掲載料を要求する粗悪なジャーナル誌の存在すら知らなかった。丹念な調査を続けてその実態を明らかにし、学术界と大学に警鐘を鳴らした影響は極めて大きい。

そうしたハゲタカジャーナルに、多くの日本の有力大学に所属する研究者の論文がすでに5000報あまり掲載されていたことも明らかにした。この一連の報道を受け、いくつかの国立大学や文部科学省も具体的な注意喚起を出している。

ハゲタカジャーナルが増えてきた背景には、学術誌がオープンアクセス化してきたネット社会と、過当な競争と業績主義におかされた学术界の現状がある。間違いデータが独り歩きしたり、使われたりすることの弊害も大きい。米国ではこのような粗悪なジャーナル誌を刊行していた出版社に55億円の支払い命令が出されるところまで来ている。

(東京大学名誉教授、帝京大学特任教授)



インパクト大きかった書物展

白川 英樹さん

金沢工業大学の「世界を変えた書物展」は、工学者や技術者の教養教育に役立てるために収集した科学や工学関係の稀覯本二千点を収集した「工学の曙文庫」を、学内で活用するだけでなく2012年に金沢、13年名古屋、15年大阪に続いて上野の森美術館で一般に公開したものだ。およそ17万人が鑑賞したという。その規模と意義、インパクトの大きさが評価されて、企画・展示としては初めての大賞受賞が実現した。

見学当日は土曜日だったせいか若い人が多く、大盛況で熱気に溢れていたことが印象に残っている。入口に続く「知の壁」に素晴らしい装丁の書籍が天井まで埋め尽くされている様は、並みの図書館では味わえない知的雰囲気を感じ出していた。それだけでなく、「知の森」、「知の繋がり」などの展示空間をデザインしたのは専門家ではなく、金沢工業大学の学生や院生の皆さんによる工夫だという。ジャンルの異なる書物間の関連性がわかるように空間が構成されており深い理解の助けになった。

(筑波大学名誉教授、ノーベル化学賞受賞)



科学・技術と社会の橋渡しとは

村上 陽一郎さん

今回、金沢工大の展示が良い結果となって、うれしく思います。かつて現地で保管状態などまで参観できた人間として展示を直接見る機会を失ってはいましたが、印象深い感想を多くの方から得ていました。個人的には、シドッチの骨を媒介として、DNA分析の最新の手法を丹念に紹介してくれた篠田さんのお仕事に感銘を受けました。

実際には科学・技術と社会の橋渡しをする場合、今でも「欠如モデル」が基軸になりがちです。社会には専門的な知識が欠けているのだから、その部分を補うことで、問題を解決しようとする立場です。それが全く無意味であるとか、無力であるとか、言うつもりは全くありません。それも大切な方法です。しかし科学・技術と社会との間に生まれるギャップの埋め方には、より根源的な様相もあると考えます。むしろ、人間の認識とは何か、その問いの先に、知識の人間のための活用とは何か、というような問題を考えさせる。迂遠なようですが、そうした試みも、今後の科学・技術ジャーナリズムの中に育っていくことを願っています。

(東京大学名誉教授、国際基督教大学名誉教授)



シリーズ討論会「未来をどう切り開くか」(第3回)

ICTは社会をどこまで変えるのか 話題提供 西村吉雄会員

インターネットの商用利用の幕開けは1995年。それ以降、情報通信技術（ICT）は社会やメディアを大きく変えてきた。シリーズ討論会の最終回は「ICTは社会をどこまで変えるのか」をテーマに3月27日、東京・内幸町の日本プレスセンタービルで開かれた。ICTの発展が経済にどう影響したかを示しながら西村吉雄会員が話題を提供、高木勲生理事がコメントーターとして加わり参加者とともに議論を交わした。

デジタル時代に低迷する経済成長

西村さんは、初めに半導体とコンピューターが誕生した40年代後半からの技術の歴史に触れ、マイクロプロセッサが誕生した70年を「デジタル化元年」とした。その登場がICT発展の最大の原動力だという。あらゆる製品のデジタル化を促し、多くの社会変化をもたらした。日本で半導体用シリコンの需要が85年頃まで急増したのは、こうした事実を裏付ける。その一方で、鉄の生産量と原油輸入量は73年をピークに伸び悩む。「鉄の時代からシリコンの時代へ」と西村さんはいう。

ICTは新たな時代を開いたとはいえ、世界的にも長期的に見るとICTは電気や自動車の登場などかつての技術革新ほど国内総生産（GDP）の伸び率に大きな影響を与えてはいないと指摘。「デジタル化以降の日本の経済成長率は基本的に低下の一途」という。日本の電子産業は75年頃から急成長したが、

急激な円高もあり、85年頃を最盛期に輸出は鈍化した。救済のために内需刺激策も実施されたが、土地や株価などが異常に高騰、バブル経済は90年代前半にはじけた。以来20年以上、低迷が続いている。

一方、米国では通信

市場が自由化された84年以降、続々と新しいビジネスモデルが登場。グーグルやアップルなどGAFAがプラットフォーマーとして自らルールを決めながらプレイヤーとしてもゲームに参加、巨大化した。最近はこの利益相反とみなし、役割を分割すべきだという声も大きい。「この分割論は実現する可能性がある」と西村さんはみる。



西村吉雄さん

情報を制するのは衆知か衆愚か

ICTの登場で大きく変わってきたメディアについても、参加者らと議論が交わされた。かつて新聞やテレビなど旧来のマスメディアしか影響力の大きな情報発信が難しかったが、今ではSNSを通じて誰でも世界に発信できる。そこで問題になってきたのが、“情報の質”をどう担保するかだ。従来は報道すべき情報の信頼性を編集過程で担保する「事前審査」が当たり前だったが、SNSなどでは「事後評価」に頼らざるを得ない。

インターネット上で衆知を集めて良質な知に転化されることもあるが、反対に不特定多数の暴力的な言論を生むリスクもある。こうした時代に「公権力を監視するプロのジャーナリストの役割をどう担保できるのがこれからの課題」と、西村さんは指摘した。

技術革新が進む一方で、経済の停滞や貧富の差の拡大、監視社会の問題点などについても議論。最後に西村さんが「中身は見えないが結果はついてくるAIやインターネットの世界をうまく解説して問題点をあぶり出していくのが、科学ジャーナリズムにとって重要」と結んだ。

(理事／副編集長 柏野裕美)



ICTが社会や経済に与えた影響などについて話す西村さんと会場参加者たち
(撮影 いずれも柏野裕美)

人間拡張工学は何をもたらすのか

東大先端研の稲見昌彦教授に聞く

「人間拡張工学がもたらすもの」をテーマに、4月17日に東京・内幸町の日本プレスセンタービルで開いた月例会は大入り満員で始まった。人間の身体能力を補完し拡大する技術の現状と可能性、人間にとっての意味や課題について、東京大学先端科学技術研究センターの稲見昌彦教授を講師に話を聞いた。

世界を広げる新しい言葉

「身体拡張」「人間拡張工学」「情報環境」——。SFの舞台設定に登場しそうな単語が次々に出てくる講演だった。稲見教授は「自分自身をいかに定義付けるか」という問いとともに、人間の可能性を「拡張性」の観点から研究している。新しい言葉は新しい世界を連れてくる。自分の身体を拡張しようだなんて、これまで考えたこともなかったが、1時間の講演のうちにその可能性に魅了された。

これまでも「当然あるもの」と考えられている身体性能に欠損が生じた場合、工学的なアプローチでリカバーしようという試みは広く行われてきた。埋め込み型補聴器、筋電義手やコンピューター内蔵の義足はユーザーが増え、力仕事を補助するパワードスーツも筋力を補う役割で進化・普及してきた。しかし、これは欠損の埋め合わせに過ぎない。拡張とは似て非なるアプローチだ。

今ある身体能力に追加して、目や耳、手足、身体までも文字通り増やす研究も進められている。自前の腕の他に、もう2本の腕があったなら？ ロボットアームを追加することで腕が4本のヒトになってみる。そのときに私たちの心身や認知、情動や社会

生活に生じる様々な変化も研究対象になっている。

講演の中で、稲見教授は数多くの実験例を提示した。突飛で面白いと感じるものばかりだったが、捉え方によっては不謹慎という批判が想像されるものもあり、その分刺激的だった。ぜひインターネットで検索



稲見昌彦教授

してみたい。拡張という言葉の中には、身体機能のみならず世間の常識や倫理観についてもその枠組みを問う面が大きかったように思う。

身体の障害は相対的な存在である。オンラインゲームの例がわかりやすかった。一昔前のオンラインゲームでは、プレイヤー同士の会話はチャットで行っていた。プレイヤーは怪物と戦ったり、畑を耕したり、誰かと会話をしたりする。活躍しているプレイヤーが現実には耳が聞こえなかったり、車椅子ユーザーだったりということもあった。コントローラーが操作できればプレイ可能な世界では、聴覚や下肢の機能は無関係だ。キーボード操作が遅い方がよほど障害だろう。「環境」が変わると「能力」は変わるのだ。

問い直される「我々とは何か」

講師の稲見教授は問いかける。「我々を我々たらしめているものは何か？」「我々と環境の相互作用という観点」「死の意味すら変わる？」——。どれもすぐには答えが出ない。ヒトのサイボーグ化について論じるときに頻出する課題「アシスト or ブースト」。この点についても稲見教授が提示する視点は独特だ。テクノロジーで超人化し、そのうえで競い合う新たなスポーツを考案したのだ。超人スポーツ協会を立ち上げ、技術開発とスポーツのルールを開発することで、この問いに挑んでいる。

ルールを決めることは世界の輪郭を決めること。どんな世界がどんな自由と障害を作るのか。面白ロボットや便利グッズの紹介から始まった講演は、世界の枠組を疑う壮大な問いを残して終了した。

(会員 高山由香)



身体能力の拡張に関するさまざまな実験例が紹介された

(撮影 いずれも柏野裕美)

地球温暖化防止をどう伝えるか

GLFワークショップに参加して

気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第49次総会に関連して5月12日午後、京都で開かれたグローバル・ランドスケープス・フォーラム（GLF）のメディア・ワークショップに参加した。地球温暖化を食い止める具体的アクションを内外の研究者とジャーナリストが共に考える機会として、国際森林研究センター（CIFOR）が主催した。

研究者とジャーナリストが議論

ワークショップに先立って、約20人の参加者とスタッフで昼食会を開いた。会場近くのカフェで、それぞれ好きな物を注文した。自然に各国の参加者たちと雑談し、互いを知ることとなる。

食後に会場の京都大学フィールド科学教育研究センターに移動。おしゃべりに花を咲かせながら数百メートルを歩いた。参加者たちは京都市街に溶け込んだ京大と、構内の豊かな緑を眺めることになる。同研究センターの建物は、京大の演習林で伐採された大木を用いて作られた由緒ある和洋折衷様式。開会挨拶では、京大の北島薫教授が建物の由来を紹介、「木造の建物を保全することは、二酸化炭素の排出を抑制するために有効」と解説した。ワークショップの舞台装置に入り、その舞台の解説を聞くことで、自然に参加者のモチベーションが高まる。

ワークショップの目的は、研究者とジャーナリストが共同で、問題解決のためのシンプルなメッセージを一般の人々に送ることだ。最初に行われたのは、最新の知見の共有だった。気候変動への取り組みは、時に政治的圧力によって活動家が殺害された歴史を

乗り越え、政治にも産業界にも変革を促しながら、着実に進行している。住民にとって経済的にも政治的にも地域の価値を高めつつ持続可能性のある取り組みをする好事例が、アマゾンの熱帯雨林やインドネシアのマングローブ林



三輪佳子さん

をはじめ、世界各地で増えている。しかし問題は、地球温暖化を食い止める具体的なアクションを持続できるかどうかにある。

研究者とジャーナリストを混合した5グループで取り上げたのは、気候変動問題の解決を呼び掛けて学校ストライキを主導した16歳のスウェーデン人少女グレタ・トゥーンベリさん。彼女のメッセージが、

なぜ各国の政治トップを含め、市民社会全体に「温暖化を食い止めなくては」という決意を呼び覚ましたのかを考えることだった。メッセージ自体の力強さや効果が多様な視点から語られたが、台湾出身の参加者からは、「台湾は若い女性が声をあ

げても世界に届かせられない社会」という切実な指摘も。成熟した市民社会と多様性は、世界のあらゆる地域に必要なだという思いを強くした。

フェイク溢れる“メディア”に疑問も

2つ目のグループワークは、「長く困難な地球温暖化抑制の道のりを進もう」という意欲を呼び覚ますメッセージを考えることだった。時間不足で具体的なメッセージには到達できなかったが、5つのグループからは個人の選択やゴミ問題など誰にも関わる重要な要素が語られた。その一方で、「科学と違ってメディアはいつも真実を語るわけではない」「フェイクニュースのほうが歓迎される」といった、ジャーナリズムの「我が身」が向き合わざるを得ない深刻な問題の提示と共有もあった。

コミュニケーションデザイン、場の設定、個々の事例、グループワーク。将来に活かすべき数多くの収穫を得た一日だった。（理事 三輪佳子）



まずはランチで気心知れた仲になる参加者たち



地球温暖化防止のメッセージをどう届けるかについて議論する研究者と参加者。右端に立つのはJASTJから参加した小出重幸理事

（写真 いずれも筆者提供）

国際化する科学とJASTJ活動

「科学はこれだけ国際化しているのに、日本のジャーナリストはなぜこれに対応しないのですか？」——。国内外の科学者たちからしばしば投げられる問いです。

現代の科学や技術は私たちの社会や生活に深くかわり、国家の政策決定にも欠かせない大切なファクターとなっていますが、国際的には、大半は英語で表現されます。学会の討論や論文の発信は、英語を共通語とすることで大きな発展を遂げました。科学と社会をつなぐジャーナリズムやコミュニケーションの世界も、この流れを追い、JASTJも参加している世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）でのやり取りも英語になっています。これに困ってしまうのが、私たち英語が不得手な日本のジャーナリストです。

明治政府の秀れた政策で、自国語で科学の高等教育まで受けられるようになった日本。世界でも類の少ない成功例なのですが、そこに安住していたら、科学はあっというまに国境を超え、縦横無尽に発展を続けています。科学の最前線を追い、監視し、社会とのかかわり取材するために、知識やコミュニケーション力も国際化しないとフォローができません。

い、という現実があります。

JASTJ創設のきっかけは、1992年に東京で世界各国の科学ジャーナリストを集めた初の国際会議が開かれたことでした。これを受けて94年に、世界との交流も目的にしてJASTJが創設されました。「世界の科学ジャーナリストは連帯しよう」という輪は広がり、2002年の第3回世界会議でWFSJ結成が宣言され、19年7月には第11回科学ジャーナリスト世界会議（WCSJ）がスイスで開かれます。創設時から携わる牧野賢治元会長、高橋真理子元副会長らの尽力で、JASTJは日本の科学報道を代表する組織、というポジションを手に入れています。

会員の中には国際活動を疑問視する意見もありますが、「現代科学の動向を取材するために、JASTJ活動の国際化は避けて通れない」と指摘する会員も多く、また国際活動のために資金支援をされる団体、個人も少なからずいます。

科学のもたらす恩恵と、破壊的な力の両面を見守るためにも、国際的な協力は不可欠です。さまざまな支援に感謝しつつ、世界の科学ジャーナリストとのネットワークを深め、次世代に継承したいと思います。（理事 小出重幸）

WEB編集長から

JASTJホームページのご利用ありがとうございます。
2019年3月以降のウェブ関連の報告をします。

■「米沢さんお別れの会」記事を掲載

事務所移転に伴い、事務局案内をリニューアルしました。もはや、めずらしくもなんともありませんが、グーグルマップで、所在地を示しています。

また、JASTJが呼びかけ人に加わった「米沢富美子さん お別れの会」の報告記事を掲載しました。赤い花々で飾られた会場のようすや雰囲気が伝わってきます。ぜひご覧ください。

■ 4年間お世話になりました

5月28日の総会をもって、JASTJのウェブ運営体制が一新しました。技術不足ながらも、ほかのメンバーに支えられ、4年にわたりウェブ編集長をつとめさせていただきました。任期中に果たせなかったことも多々ありましたが、みなさんから原稿や提案をいただき、ウェブ運営を維持することができました。どうもありがとうございます。

ございました。（前Web編集長 漆原次郎）

■ 新任ご挨拶

これからWeb編集長を務めさせていただきます、カクタス・コミュニケーションズの湯浅です。これまでは監事としてJASTJに関わらせていただいておりますが、今後は理事・Web編集長として、前任者の皆様が築いてこられたウェブサイトをしっかり引継ぎ、そして更なる充実を図るべく、業務に邁進したいと思います。個人的にはJASTJの国際化に興味がありますので、会員の皆様のご意見を伺いながら、徐々に対外発信の強化を行っていかれたらと思います。

まだまだ右も左もわからない状態ですので、ウェブサイトの情報発信が遅れている、内容が少ないなどなど、気になる事がありましたら、いつでもご連絡ください。そしてJASTJのウェブサイトと一緒に充実させていきたいと思われる方がいらしたら、大歓迎します。その際は事務局までご一報ください。皆様、これからどうぞよろしくお願い致します。（Web編集長 湯浅誠）

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2019年6月現在)



一般財団法人 新技術振興渡辺記念会



AE 海老名・綾瀬法律事務所

科学技術に強い法律事務所です。
弁護士 中道 徹 (神奈川県弁護士会)

AE 海老名・綾瀬法律事務所



東京理科大学
Tokyo University of Science

東京理科大学



ELSEVIER

エルゼビア・ジャパン株式会社

TOSHIBA
Leading Innovation >>>

株式会社東芝



花王株式会社



公益社団法人
日本アイソトープ協会
Japan Radioisotope Association

公益社団法人 日本アイソトープ協会



国立研究開発法人
科学技術振興機構
Japan Science and Technology Agency

国立研究開発法人 科学技術振興機構



株式会社 日本医工研究所
Japan Medical Engineering Institute

株式会社日本医工研究所

CACTUS

カクタス・コミュニケーションズ株式会社



JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE
日本学術振興会

日本学術振興会



構造計画研究所
KOZO KEIKAKU ENGINEERING Inc.

株式会社構造計画研究所



国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構

SUNTORY

サントリーホールディングス株式会社



ロート製薬株式会社

■ 新入会員の自己紹介

● 齋藤 俊明 (つくばエキスポセンター)

大学在学中からサイエンスコミュニケーションに興味をもち、現在は科学館で働きながら自分なりのサイエンスコミュニケーションを模索しています。JASTJの活動への参加を通して、科学を社会に訴えかける姿勢を学び、自分の活動の成長にもつなげたいと考えています。

● 小原 香恋 (クラリベイト・アナリティクス・ジャパン株式会社)

クラリベイト・アナリティクスの広報担当として5月より入社しました。さまざまな業界での広報活動に携わってきましたが、科学技術分野は未知の世界で勉強したいと思っています。個人的にも興味がある分野で世の中に啓蒙活動をする一助となればと思っています。よろしく願いいたします。

● 渡辺 麻子 (クラリベイト・アナリティクス・ジャパン株式会社)

学術引用データベース事業に長年携わってきました。日本の研究は停滞しているといわれていますが、引用分析やオープンアクセスなどの研究論文をとりまく世界的動向を注視しながら、停滞しているといわれている日本の研究に希望の光が見えそうか皆様と考えたいと思っています。

退会

柴藤亮介、藤井晴雄、鈴木紀之、石田勝彦、田内雄司、渡辺哲也、中村雅美 (ご逝去)

■ 賛助会員の自己紹介

● 公益社団法人 日本アイソトープ協会

(新藤元司・菊地英俊)

日本アイソトープ協会は、我が国におけるアイソトープの利用促進と安全確保に資するため、普及啓発から、アイソトープの供給、技術開発、測定技術の研究、使用に伴い発生する廃棄物の集荷・処理まで一貫して行っています。

● 国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構

(松橋信平・中禎弘)

量子科学技術研究開発機構 (量研、QST:キューエスティ) は、放射線科学や量子ビーム応用研究、核融合研究開発を通じて量子科学技術の水準を向上させ、医療、ライフサイエンス、ナノテクノロジー等の産業での利用やイノベーション創出を目指す国立研究開発法人です。

■ お知らせ

● 年会費納入のお願い

新年度に入り、事務局から7月上旬までに各会員に年会費納入のお願いを通知する予定です。7月末までに以下の振込先をお願いします。今年度から地方会員だけでなく、学生・大

編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

会員の BOOKS

新刊紹介

「証言 BSE問題の真実」

唐木英明編著 (さきたま出版会・2700円 + 税・2018年12月)

日本でのBSE発見から18年、すでにその詳細は忘れられている。日本だけが全頭検査を「安全対策」として導入し、メディアも消費者もこれを「安全対策」と誤解した。米国産牛肉の輸入再開交渉では米国に全頭検査を要求して拒否され、国民は米国を非難。しかし、政府はいまさら「安全対策ではない」と言えず、検査の見直しを食品安全委員会に丸投げし、同委員会は輸入再開の責任を追及された。本書はその間の経緯などを関係者の証言でつづり、問題の検証を行った。(会員 唐木英明)



「ヒトはなぜ宇宙に魅かれるのか—天からの文を読み解く」

縣秀彦著 (経法ビジネス新書・800円+税・2019年3月)

伝わる文章を書く極意は『喋るように書く』ことだと聞いた。音読も心地良い本書の著者は国立天文台の顔であり、理科教員で定時制高校の教壇にも立っていた。たくさん喋ってきたからこそそのリズムで、ミクロとマクロを滑らかに往き来する。命を作る元素から宇宙ビジネス、ブラックホールに宇宙の果てまで、最新の話題・情報が満載だ。新発見が続く天文分野の解説は有り難い。読後は空を見上げて、昔見た星座を探したくなるだろう。(会員 高山由香)



学院生 (要理事会承認) も半額になりました。なお入会申し込みの希望者は事務局にご連絡ください。入会金は不要です。

会 費: 会員 (個人) 12,000円 (地方会員、学生会員は6,000円)

賛助会員 120,000円 (1口)

振込先: みずほ銀行虎ノ門支店 (普通) 1826458 名義 日本科学技術ジャーナリスト会議、または郵便口座振替 00120-5-369724 名義JASTJ

【訂正】前号90号の「新入会委員の自己紹介」欄で「倉澤 治雄 (株式会社エヌ・ティー・エス)」としましたが、正しくは「倉澤 治雄 (フリージャーナリスト、元日本テレビ)」です。

編集
後記

▶今号は毎年恒例の科学ジャーナリスト賞特集で、通常より4ページ多い16ページ建て。そのうえ当初執筆をお願いしていた筆者からの原稿がいつまでたっても出て来ず、大変でした。未着の原稿は急ぎよ柏野副編集長に代打ちをお願いし、倉又副編集長も緻密な校閲作業をしてくれたため、何とか乗り切れました。昨年、副編集長二人体制にしましたが、それが大きな効果を発揮し大助かりでした。(鞆)

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1
日本プレスセンタービル8階848
Email: hello@jastj.jp

会長 佐藤年緒/事務局長 山本威一郎
編集長 高木鞆生/副編集長 柏野裕美、倉又茂